

## § 7.4 Hamilton-Jacobi の理論の測地線への応用

線素  $ds$  が

$$ds^2 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N g_{ij}(\mathbf{q}) dq_i dq_j, \quad g_{ij} = g_{ji} \quad (7.4.1)$$

で与えられる Riemann 空間  $R_N$  を考えよう。  $R_N$  の 2 点  $P_0(\mathbf{q}_0) = P_0(q_{00}, q_{01}, \dots, q_{0N})$  と  $P_1(\mathbf{q}_1) = P_1(q_{10}, q_{11}, \dots, q_{1N})$  を結ぶ測地線

$$\mathbf{q} = \mathbf{q}(t), \quad 0 < t < 1 \quad (7.4.2a)$$

$$\mathbf{q}(0) = \mathbf{q}_0, \quad \mathbf{q}(1) = \mathbf{q}_1, \quad (7.4.2b)$$

とは、最小値問題

$$J[\mathbf{q}] = \int_0^1 Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}})^{1/2} dt = \min \quad (7.4.3a)$$

under

$$\mathbf{q}(0) = \mathbf{q}_0, \quad \mathbf{q}(1) = \mathbf{q}_1, \quad (7.4.3b)$$

の解である。ここで

$$Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N g_{ij}(\mathbf{q}) \dot{q}_i \dot{q}_j \quad (7.4.4)$$

とする。

(7.4.3)式で与えられる最小値問題の Euler の方程式は

$$\frac{d}{dt} (Q^{-1/2} Q_{\dot{q}_i}) = Q^{-1/2} Q_{q_i} \quad (7.4.5a)$$

or

$$\frac{d}{dt} (Q^{-1/2} Q_{\dot{q}_i}) = Q^{-1/2} Q_{q_i}, \quad (i = 1, 2, \dots, N) \quad (7.4.5b)$$

である。  $Q^{-1/2}$  の項があるので、残念ながら (7.4.3)式で与えられる変分問題は正則でない。

パラメータ  $t$  には任意性があるので、  $t$  の選び方として、停留曲線上の固定点  $P_0(\mathbf{q}_0)$  と動点  $P(\mathbf{q})$  を結ぶ弧の長さ  $P_0P$  の全長  $P_0P_1 = l$  との比を  $t$  の値とすると

$$ds = Q^{1/2} dt = l dt \quad (7.4.6)$$

であるから

$$Q^{1/2} = l \quad (7.4.7)$$

となる。これを、(7.4.5)式に代入すると

$$\frac{d}{dt}Q_{\dot{q}} = Q_q, \quad 0 < t < 1 \quad (7.4.8)$$

を得る。これより，(7.4.3)式の最小値問題の解，すなわち停留曲線は，正則な最小値問題

$$I[\mathbf{q}] = \frac{1}{2} \int_0^1 Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) dt = \min \quad (7.4.9a)$$

under

$$\mathbf{q}(0) = \mathbf{q}_0, \quad \mathbf{q}(1) = \mathbf{q}_1, \quad (7.4.9b)$$

の解であることが分かる。

(7.4.9)式で与えられる最小値問題の解、すなわち(7.4.8)式を満たす解、すなわち停留曲線が(7.4.7)式を満たしていないと矛盾するが、このことは以下のようにして証明される。(7.4.4)式より、 $Q$ は $\dot{q}$ の2次の同次式であるから

$$\dot{q}Q_{\dot{q}} = 2Q \quad (7.4.10)$$

がいえる。この式の両辺を $t$ で微分すると

$$\ddot{q}Q_{\dot{q}} + \dot{q} \frac{dQ_{\dot{q}}}{dt} = 2 \frac{dQ}{dt} \quad (7.4.11)$$

となるが、(7.4.8)式を代入すると

$$\ddot{q}Q_{\dot{q}} + \dot{q}Q_q = 2 \frac{dQ}{dt} \quad (7.4.12)$$

を得る。この式の左辺は $dQ/dt$ に外ならない。したがって

$$\frac{dQ}{dt} = 0 \quad \text{or} \quad Q = \text{const} \quad (7.4.13)$$

が成り立つ。一方、全長 $l$ の定義より

$$l = \int_0^1 Q^{1/2} dt = Q^{1/2} \quad (7.4.14)$$

であるので、(7.4.7)式が言える。

$J[\mathbf{q}]$ と $I[\mathbf{q}]$ は同じ停留関数を持ち、停留関数を $q$ とすると停留値の間には

$$j[\mathbf{q}] = l \quad (7.4.15a)$$

$$I[\mathbf{q}] = \frac{1}{2} l^2 = \frac{1}{2} (J[\mathbf{q}])^2 \quad (7.4.15b)$$

の関係がある。いま、パラメータ  $t$  を  $0 \leq t \leq 1$  としている。(7.4.15a)式はパラメータ  $t$  の取り方に関係なく成り立つが、(7.4.15b)式はパラメータ  $t$  の取り方に依存する。もし、パラメータ  $t$  を  $t_0 \leq t \leq t_1$  とすると

$$ds = Q^{1/2} dt = l \frac{dt}{t_1 - t_0} \quad (7.4.16)$$

であるから

$$Q^{1/2} = \frac{l}{t_1 - t_0} \quad (7.4.17)$$

となる。これを、(7.4.9a)式に代入すると

$$I[\mathbf{q}] = \frac{1}{2} \int_{t_0}^{t_1} Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) dt = \frac{1}{2} \frac{l^2}{t_1 - t_0} = \frac{1}{2} \frac{J[\mathbf{q}]^2}{t_1 - t_0} \quad (7.4.18)$$

となる。

$N$ 次元ユークリッド (Euclid) 空間では

$$ds^2 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \delta_{ij}(\mathbf{q}) dq_i dq_j = \sum_{i=1}^N dq_i^2 = (d\mathbf{q})^2 \quad (7.4.19)$$

であるから、(7.4.4)式から

$$Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \delta_{ij}(\mathbf{q}) \dot{q}_i \dot{q}_j = \sum_{i=1}^N \dot{q}_i^2 = \dot{\mathbf{q}}^2 \quad (7.4.20)$$

となる。したがって、測地線の満たすべき方程式は、(7.4.8)式より

$$\ddot{\mathbf{q}} = 0, \quad t_0 < t < t_1 \quad (7.4.21)$$

であるので、測地線は  $\mathbf{q}_0$  と  $\mathbf{q}_1$  を結ぶ直線

$$\mathbf{q} = \frac{\mathbf{q}_1 - \mathbf{q}_0}{t_1 - t_0} (t - t_0) + \mathbf{q}_0, \quad t_0 < t < t_1 \quad (7.4.22)$$

で与えられる。このとき、(7.4.18)式から測地線の長さは

$$J[\mathbf{q}]^2 = 2(t_1 - t_0)I[\mathbf{q}] = (t_1 - t_0) \int_{t_0}^{t_1} Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) dt = (\mathbf{q}_1 - \mathbf{q}_0)^2 \quad (7.4.23)$$

というよく知られた結果になる。

つぎに、Hamilton-Jacobi の理論を適用してみよう。(7.4.9a)式の汎関数の被積分関数

$$L(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) = \frac{1}{2} Q(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) = \frac{1}{2} \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N g_{ij}(\mathbf{q}) \dot{q}_i \dot{q}_j \quad (7.4.24)$$

に、(7.3.4)式で与えられる Legendre 変換を適用すると

$$p_i = L_{\dot{q}_i} = \sum_{j=1}^N g_{ij}(\mathbf{q}) \dot{q}_j, \quad (i=1,2,\dots,N) \quad (7.4.25)$$

となる。ここで

$$[h_{ij}] = [g_{ij}]^{-1} \quad (7.4.26a)$$

or

$$\sum_{k=1}^N h_{ik} g_{kj} = \delta_{ij}, \quad (i, j=1,2,\dots,N) \quad (7.4.26b)$$

とすると, (7.4.25)式を  $\dot{q}_i$  について

$$\dot{q}_i = \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) p_j, \quad (i=1,2,\dots,N) \quad (7.4.27)$$

と解くことができる。したがって, (7.3.4b)式より Hamilton 関数  $H(\mathbf{q}, \mathbf{p})$  が

$$\begin{aligned} H(\mathbf{q}, \mathbf{p}) &= \mathbf{p}\dot{\mathbf{q}} - L(\mathbf{q}, \dot{\mathbf{q}}) \\ &= \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) p_i p_j - \frac{1}{2} \sum_{i=1}^N g_{ij} \left( \sum_{k=1}^N h_{ik}(\mathbf{q}) p_k \right) \left( \sum_{l=1}^N h_{jl}(\mathbf{q}) p_l \right) \\ &= \frac{1}{2} \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) p_i p_j \end{aligned} \quad (7.4.28)$$

と求まる。

これより, 正準方程式は(7.3.7)式より

$$\dot{q}_i = H_{p_i} = \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) p_j \quad (7.4.29a)$$

$$\dot{p}_i = -H_{q_i} = -\frac{1}{2} \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \frac{\partial h_{ij}(\mathbf{q})}{\partial q_i} p_i p_j \quad (7.4.29b)$$

で与えられる。Hamilton-Jacobi の方程式は, (7.3.10)式より

$$\frac{\partial W}{\partial t} + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial W}{\partial q_i} \frac{\partial W}{\partial q_j} = 0 \quad (7.4.30)$$

となる。

(7.4.30)式は,  $t$  を陽に含まないので, 変数分離解

$$W = \alpha_1^{1/2} V(\mathbf{q}) - \frac{1}{2} \alpha_1 t \quad (7.4.31)$$

が可能である。これを, (7.4.30)式に代入すると

$$\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial V}{\partial q_i} \frac{\partial V}{\partial q_j} = 1 \quad (7.4.32)$$

が得られる。この微分方程式の解で  $N-1$  個のパラメータ  $\alpha_2, \alpha_3, \dots, \alpha_N$  を含むものが求めれば, (7.4.31)により,  $N$  個のパラメータ  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots, \alpha_N$  を含む (7.4.30) 式で与えられる Hamilton-Jacobi の方程式の完全解が求まったことになるので, (7.3.19)式により測地線の方程式が得られる。このうち,  $k = 2, 3, \dots, N$  に対するものは  $t$  を含まないので, それだけで測地線の方程式になっている。(7.4.31)式を  $\alpha_i$  ( $i = 2, 3, \dots, N$ ) で微分すると, (7.3.19)式より

$$\frac{\partial W}{\partial \alpha_i} = \alpha_1^{1/2} \frac{\partial V(\mathbf{q})}{\partial \alpha_i} = \beta_i \quad \text{or} \quad \frac{\partial V(\mathbf{q})}{\partial \alpha_i} = \alpha_1^{-1/2} \beta_i \quad (7.4.33)$$

であるので,  $\alpha_i^{1/2} \beta_i = \beta'_i$  とすると, この測地線は  $\alpha_i, \beta'_i$  ( $i = 2, 3, \dots, N$ ) の  $N-2$  個の任意定数を含むことになる。

特に, 定点  $P_0$  を通る停留曲線に沿って  $Q$  を積分して得られる Hamilton の主関数を  $U(t, \mathbf{q})$  とすると, (7.4.18)式によって

$$U = \frac{1}{2} \frac{R(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0)}{(t-t_0)} \quad (7.4.34)$$

である。ここで,  $R(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0)$  は点  $\mathbf{q}$  と  $\mathbf{q}_0$  との測地的距離の平方とする。 $U$  は (7.4.30)式を満たすはずである。 $U$  を (7.4.30)式に代入すると,  $R(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0)$  は微分方程式

$$\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial R}{\partial q_i} \frac{\partial R}{\partial q_j} = 4R \quad (7.4.35)$$

を満足する。したがって, 測地的距離

$$r(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0) = R(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0)^{1/2} \quad (7.4.36)$$

自身は

$$\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial r}{\partial q_i} \frac{\partial r}{\partial q_j} = 1 \quad (7.4.37)$$

を満足する。

上述した  $N$  次元 Euclid 空間の例では, (7.4.23)式によって

$$R(\mathbf{q}, \mathbf{q}_0) = (\mathbf{q} - \mathbf{q}_0)^2 = \sum_{i=1}^N (q_i - q_{0i})^2 \quad (7.4.38)$$

であるので

$$\frac{\partial R}{\partial q_i} = 2(q_i - q_{0i}) \quad (7.4.39)$$

となる。したがって

$$\begin{aligned}\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial R}{\partial q_i} \frac{\partial R}{\partial q_j} &= \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \delta_{ij}(\mathbf{q})(q_i - q_{0i})(q_j - q_{0j}) \\ &= 4 \sum_{i=1}^N (q_i - q_{0i})^2 = 4R\end{aligned}\quad (7.4.40)$$

であるので，(7.4.35)式が満足されている。

[例 7.4.1] つぎに，回転面上の測地線について考えて見よう。直行座標を  $x, y, z$  として， $z$  軸を回転軸とする  $\rho = (x^2 + y^2)^{1/2} = \rho(z)$  で表される回転面を考える。面上の曲線座標として， $z$  と  $z$  軸まわりの角度  $\phi$  をとると，線素  $ds$  は

$$ds^2 = (\rho d\phi)^2 + d\rho^2 + dz^2 = \left[ 1 + \left( \frac{d\rho}{dz} \right)^2 \right] dz^2 + \rho^2 d\phi^2 \quad (7.4.41)$$

である。ここで

$$q_1 = \int^z \left[ 1 + \left( \frac{d\rho}{dz} \right)^2 \right]^{1/2} dz, \quad q_2 = \phi \quad (7.4.42)$$

とすると， $ds^2$  は

$$ds^2 = dq_1^2 + f(q_1)^2 dq_2^2 \quad (7.4.43)$$

と書ける。ここで

$$\rho = \rho(z) = f(q_1) \quad (7.4.44)$$

とする。したがって

$$g_{11} = 1, \quad g_{12} = g_{21} = 0, \quad g_{22} = f(q_1)^2 \quad (7.4.45)$$

および

$$h_{11} = 1, \quad h_{12} = h_{21} = 0, \quad h_{22} = 1/f(q_1)^2 \quad (7.4.46)$$

であるので，

$$\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N h_{ij}(\mathbf{q}) \frac{\partial V}{\partial q_i} \frac{\partial V}{\partial q_j} = \left( \frac{\partial V}{\partial q_1} \right)^2 + \frac{1}{f(q_1)^2} \left( \frac{\partial V}{\partial q_2} \right)^2 = 1 \quad (7.4.47)$$

を得る。この方程式は変数分離で解けて

$$V = \pm \int^{q_1} \left[ 1 - \frac{\alpha_2^2}{f(q)^2} \right]^{1/2} dq + \alpha_2 q_2 \quad (7.4.48)$$

となる。これを(7.4.31)式に代入して，(7.3.19)式に従って  $\partial W / \partial \alpha_2 = \beta_2$  と

おけば

$$\pm \int^{q_1} [f(q)^2 - \alpha_2^2]^{-1/2} f(q)^{-1} dq = q_2 - \alpha_1^{-1/2} \beta_2 \quad (7.4.49)$$

を得る。これが測地線の方程式である。 $\alpha_1^{-1/2} \beta_2 = \beta_2'$ を積分定数と考えてもよい。

## § 7.5 参考文献

[7.1] 寺沢寛一編, 「数学概論(応用編)」, 岩波書店, (1960)

[7.2] 伏見康治, 「現代物理学を学ぶための古典力学」, 岩波書店, (1964)